

●山岳ガイド 佐伯友邦さん

峰の切れ間から出する朝日の神々しさや夕日に染まった雄大な美しさを演出する立山連峰は、眺める者をその頂へと駆り立てる。登山者に立山を案内する山岳ガイドとして彼らを幾度となく山へ導いてきた人がいる。登山者に向けられた案内人の心を探る。

芦峯寺の山岳ガイドの歴史は大正時代に発足した『芦峯山案内人組合』にさかのぼる。組合員の中には必ず、山の神様と呼ばれる男たちがいた。昭和31年の第一次南極観測隊にも参加するなど、芦峯寺の山岳ガイドは全国的にも有名だった。

第二次世界大戦後、立山の交通網はどんどん整備されていった。昭和29年には美女平までケーブルカーがつながり、その後、高度2、450メートルの室堂まで高原バスが走るようになる。雄山登頂くらいなら、ガイドなしで誰でもできるようになった。昭和30年ごろに何十人といったガイドは、昭和50年代に

『立山ガイド協会』と名を変え、新たなスタートを切った。現在では、ガイドも明確なランク付けがなされ、厳しい検定試験も実施されている。

は仕事を失い、ほとんど活動していない状態になった。日本経済の成長は中高年の登山ブームを生み、それにより再びガイドの需要が増えてきた。日本山岳ガイド連盟（現日本山岳ガイド協会）が結成された平成3年、芦峯寺山案内人組合も



▶昭和44年11月1日午後2時45分、ヒマラヤ登頂に成功した佐伯さん。

も、小屋の経営のかたわら山岳ガイドとして活動している。昭和44年にヒマラヤ（グルジャ・ヒマール7、193メートル）登頂を果たすなど、山のスペシャリストである佐伯さんは、40年以上にわたり数え切れない人を立山に案内した。現在は、指導者として若いガイドを育てている。「ガイドはお客さんに遠慮してはだめだ」という指導方針を聞いたとき、少し違和感を覚えたが説明を聞いて納得した。「私たちガイドは危険な場所や安全なルートを教えることはできるけれど、1人で20人担げるようなスーパーマン

じゃありませんからね。ガイドがいるから絶対安心と思われることが、逆に危険な事故につながるんです」。ガイドの仕事は、お客さんを楽しませながら、同時にお客さんの気持ちを引き締めることなのだ。

剣沢小屋は剣岳のふもとにある。したがって佐伯さんが案内する場所も、この山が多い。剣岳と言うと立山町の隣り、上市町の山というイメージが強いが、決してそんなことはない。地図で確認すると一目瞭然だ

遭難の山じゃない、感動の山にしたい。怖い山でいい。事故のない山になってほしい。山で、悲しい思い出はつくってほしくない。

が、稜線の東側半分は立山町に属する。また、剣岳に登る登山者のほとんどが立山町側から入る。剣沢小屋は、室堂から3時間あまりの場所にあり、剣岳を目指す登山者に多く利用されている。

まう。少しでも事故を減らすこと。これが私の願いであり、そのために自分ができていることをしています。1週間に1度、山小屋から剣岳に続く登山ルートを自分で歩く。登山道や雪渓の状態はどうか、自分の目で確かめるためだ。気が付いたことは、登山道を描いた自作地図に書き込む。小屋に宿泊した客や休憩に立ち寄った登山者全員にこれを渡し、危険な場所を細かく説明する。気軽に登れる山になったことは、時には危険な登山者を生むこともある。「ピクニック気分



▲9月8日に登山道を歩いて描いた佐伯さんオリジナルの剣岳登山マップ。危険箇所や登山の注意点が書いてある。

で剣に登る人がたまにいる。装備も心構えも不十分。有史以来、300人以上の人を飲み込んできた剣岳は甘くない。でも、そんな人にも事故には遭ってほしくないんです。7、8年前から始めたこの地図づくりは、そんな登山者が増えてきたからだ。「遭難の山じゃない、感動の山にしたい。怖い山でいい。事故のない山になってほしい」。

剣岳に登った人は皆、口をそろえる。百名山の中でもこんなにすばらしい山はないと。だからこそ願う。感動の山で、悲しい思い出はつくってほしくない。「3時に起きて、まず神棚の水を替える。昨日の無事に感謝し、今日の無事故を祈る。そうやって小屋の1日が始まる」。下界では神様を意識することはめったにないのに、山に入ると自然に手を合わせてしまう。「それほど厳しい環境なんです。山というのは」。山を愛し、山を愛する人を愛する佐伯さん。山に違いない。

●さえき・とむくに

山岳ガイド。剣沢小屋主人。昭和38年、20歳で剣沢小屋に入る。遭難事故発生時には山岳警備隊の救助活動に協力する。昭和44年にヒマラヤ登頂に成功。平成13年、環境大臣表彰。平成15年、内閣総理大臣表彰。平成16年、立山町表彰。立山町芦峯寺在住。62歳。